

# 黒人研究の会

## 黒人研究の会 会報

第63号 2006年6月24日

### 例会発表要旨

1月例会 2006年1月28日(土)神戸市外国語大学

#### ① 何故白人が黒人音楽を聴くのか？

鉄

井 孝司

白人が黒人音楽に傾倒するのは何故かという疑問は、私たち日本人

(アジア人)が音楽をはじめ黒人の文化に興味を抱くのは何故かという問と通低している。共に2005年に出版されたBakari Kitwanaによる書物と、Paul Taylorの論文を取り上げることでこれを考察した。Kitwanaはアメリカ史上初めて事実上の人種隔離政策とは無縁の一生を送る世代が既に登場していることから、従来の人種をめぐる議論が時代遅れになっていることを指摘し、アメリカ社会に起こりつつある新しい変化によって白人/黒人の区別から出発する議論は意義を失っていると主張する。そしてヒップ・ホップという黒人の生み出した文化運動が既に黒人以外のアメリカの新しい世代にとっても重要な存在になっていると結論づけた。一方Taylorは自らが黒人であるにもかかわらず、ヒップ・ホップから距離を置いている自分に気づき、それは何故かを考える。もし、「黒人であるなら自らが属する集団が生み出した文化運動に積極的に関与するのは当然の義務だ」とする議論を正当化しようとするれば結局コーネル・ウエストのいう“Racialist Reasoning”に頼らざるを得ず、文化と人種的集団の間に固定的、必然的な関係があることを無批判に受け入れることになってしまう。TaylorはKitwanaとは違った視点から出発しているが、結局両者はその問自体を無化することで結論を出している。つまり特定の人種的・民族的集団がその文化創造に関与したにせよ、それを発展・維持するのは他の

集団であっても何ら問題はないし、これはアメリカ社会を筆頭に文化の混交状態にあるところではむしろ自然なことなのである。両者はこのようにして人種・民族とその文化の間にある本質主義的思考からの脱却を図っているように見える。

## ② Beacon Hill - Jacksonville - Eatonville

西垣内 磨留美

ボストン、ビーコン・ヒルの Black Heritage Trail、ジャクソンビルの La Villa Museum、イートンビルの Zora Neale Hurston Festival について、写真その他の資料とともに報告、紹介した。Black Heritage Trail は、ビーコン・ヒル地区とボストン・コモンとの境界となる通りに面して建つ南北戦争 54 連隊の募兵の地を記念するメモリアルに始まり、Lewis Hayden House など地下鉄道で駅となった家々を経て、かつては集会所かつ子弟の学校であり現在はこの地区の黒人の歴史の展示館となっている African Meeting House に終わる、奴隷制廃止運動に関連する歴史的建造物をたどる道である。La Villa Museum は、ジャクソンビル出身の James Weldon

Johnson と弟 John Rosamond に関する資料の常設館である。二人の人物と映像からなる 10 分程度のパフォーマンスや資料を見学し、フロリダ東北部の黒人の日常生活の歴史に触れる通路を通り、期間限定の黒人芸術の展示場に至るという行程である。Zora Neale Hurston Festival はフロリダ州イートンビルで毎年 1 月に開催される多彩な催しであるが、黒人研究の会第 49 回全国大会で行った発表の追補的な報告をさせていただいた。

2月例会 2006年2月25日(土)キャンパスプラザ京都

### シンポジウム <米国におけるカトリーナ災害と黒人>

コーディネーター : 山本  
伸

【日米政府の対応から見えてくるもの—人種と階級、国家と国民、災禍とビジネス—】本発表では、ハリケーン「カトリーナ」襲来後の米政府の対

応と被災者への首脳部の態度を、ブッシュ大統領（牧場での休暇続行）はじめライス長官（五番街での買い物続行）らの事例を取り上げながら整理し、同時にイラク戦争へ政府の取り組みを対比的に示すことで、いかにアメリカが国家中心に動いているか、国民が置き去りにされているかを述べた。またライスに象徴されるように、今回あらためて確認された人種問題に加えて、階級（国家と重なる部分多々）問題が貧困層の黒人を大いに圧迫していることも確認した。さらには、かつてのベトナム、湾岸、イランイラクがそうであったように、国家側について一部の階級層が文字通りインサイダーによって戦争や災害を好機に暴利をむさぼっていることを、チェイニーの関連会社を例に示した。たまたま私はいまこの要旨をロンドン郊外で書いているが、連日のBBCでの論評や滞在する関係機関のスタッフらとの会話からして、イギリス国民はアメリカの態度にはきわめて否定的である。BBCでの数字では、87%がイラク戦争反対だった。このことも踏まえて、独走・暴走するアメリカという国家を、そろそろ英語圏や欧米といった枠の外に出して考えることが必要だろうし、そのうえでわれわれの黒人研究がどんな意味をもつのかをあらためて問う時期が来ていると思う。

## ① ハリケーン・カトリーナと黒人文学

木内 徹

ハリケーン・カトリーナは特にニューオーリンズに被害を与えた。平成17年12月末に行われたMLAの黒人文学分会の公開役員会で、黒人大学のディラード大学や、チュレーン大学に至るまで、ニューオーリンズのあらゆる大学の英文科の専任教員は本をすべて流されてしまったので、MLA会員はそういう先生たちに本を寄付してほしいと呼びかけていた。

ニューオーリンズは1927年にも大洪水によって被災し、黒人歌手や音楽家ばかりではなく黒人作家の文学上の題材となった。リチャード・ライトの“Down by the Riverside”(「河畔にて」)という短編や、ラングストン・ヒューズの詩「ミシシッピの堤防」などもそうである。

ニューオーリンズの黒人文化の伝統は、黒人芸術家や、ニューオーリンズ生まれの19世紀の劇作家ヴィクター・セジュール(1817-1874)に始まって、アーネスト・ゲインズにいたるまで、ニューオーリンズゆかりの黒人作家たちが営々たる努力のすえに築き上げたものであることがわかる。黒人作家でニューオーリンズを舞台にして小説を書いた作家も数多くいる。チャール

ズ・チェスナットの小説『ポール・マルシャン—自由黒人』もそうである。

風呂本惇子氏編集の『アメリカ文学とニューオーリンズ』（鷹書房弓プレス）でゾラ・ニール・ハーストンの『驟馬と人』、マーカス・クリスチャン（1900-1976）、トム・デント（1932-1998）、カラム・ヤ・サラーム（1947- ）といった3人の黒人作家がとりあげられている。自分自身も受けた黒人詩人カラム・ヤ・サラームは「その人々の話を聴け」プロジェクトを立ち上げ、カトリーナの災害に遭った人の体験談のデータベースにするとのことである。ハリケーン・カトリーナは黒人文学に大きな素材を与えた。

## ② 洪水とリプロダクティブ・ヘルス——妊娠、出産、墮胎をめぐる文学的想像と現実

中地 幸

1927年のミシシッピ川の大洪水はアメリカ文学の記憶の中に書き込まれてきたという意味で興味深い。William Faulkner, Robert Frost, Langston Hughes, Zora Neal Hurston, Richard Wright など多くのアメリカの南部作家たちが洪水のテーマに取り組んでいるが、この中で Faulkner

と Richard Wright の作品は 1927 年の大洪水の中で救出作業を行った人間に焦点を当てているという点において共通点を持つ。また両作品とも臨月を迎えた妊婦の救出を描いている。しかしながら、Faulkner が白人男性の視点から物語を構築するのに対し、黒人の Wright は災害にあってもなお生々しく存在する人種差別の問題を取り組んだという意味において、より今日的なインパクトを持つといえるだろう。本発表では、1927 年の大洪水を概観するとともに、この災害が文学的な想像力にどのような影響をあたえたかを探ると同時に “Old Man” と “Down by the Riverside” を、両作家が描き出す「妊婦」に焦点をあて検討する。優生学と複雑に絡み合ったアフリカ系アメリカ人女性とリプロダクティブ・ヘルスの問題を歴史的な視点から捉えると共に、文学的な想像としての妊娠、出産、墮胎と、現実のアフリカ系アメリカ人女性の性と生殖の問題を、昨年のハリケーン・カトリーナによる被害と被災者女性の健康問題の関係に目を配りながら、考察していく。

コメント

カトリーナとアフリカン・アメリカン

司会 : 森 あおい



2005年8月29日に、アメリカ南部をカテゴリー5という最大級のハリケーン、カトリーナが直撃した。その結果、ニューオーリンズの町が水没し、多くの人々が命を落とし、また辛うじて命を落とさなかったものの、家が倒壊したり、また水浸しになったため、住み慣れた土地を離れ不自由な避難所生活を余儀なくされた人々も数多くいた。当初、メディアではカトリーナによる被害の大きさに報道の焦点が当てられていた。しかし次第に、このカトリーナの被害の大きさに加えて、救援の遅れから、カトリーナが内包する人種差別問題が取沙汰されるようになっていった。つまり、カトリーナは単なる自然災害などではなく、その人口の3分の2以上が黒人で、しかも低所得者が多いニューオーリンズだからこそ起きた、人種差別に起因する人災だという指摘がなされるようになったのである。ハリケーン・カトリーナの襲来は、アメリカ社会に巣食う根深い人種差別問題を露呈していくことになったのである。

今回のシンポジウムでは、カトリーナに見られる人種差別問題について、メディアの報道を通して司会が概観するところから始まった。まず、ラッパーのカニエ・ウエストが出演した赤十字社のチャリティ番組のビデオのクリップと、それについての『ワシントンポスト』紙に掲載された記事を紹介

し、ウエストが本音で語るアメリカ社会に蔓延する人種差別批判と、彼の発言が引き起こした波紋について検証した。次に、メディアの報道における被災者の呼び方について、『ニューヨーク・タイムズ』やAP通信など多くのメディアで使われた“refugee”(「避難民」)という言葉に着目し、この言葉に隠されている米国の人種差別意識を明らかにした。

司会の導入に引き続き、三人の講師が政治的、社会的、歴史的、文学的な側面から、カトリナと災害に見る人種問題について議論を展開した。

4月例会 2006年4月22日(土)大阪工業大学

## ① ブルースの歌詞に見られる語彙

尾山 誉

ブルースの歌詞の中には、とても直接的で口語的言語が使用され、黒人の日々の生活を時には冷やかに、時には情熱的に表現している。何気ない日々の生活や感情を飾り気のない方法で表現しているブルー

スの歌詞には、黒人的エッセンスが凝縮されていると思われ、アメリカ黒人文化をより理解するためには避けて通ることの出来ない題材であると考える。

本発表では、ブルースの歌詞の中で使用されている語彙の中でも、非標準的に使用されている動詞・副詞と特徴的な名詞を考察する。非標準的に使用されている動詞・副詞は、非標準英語・アメリカ南部方言・黒人英語のいずれかに分類してみる。そして名詞では、その歌詞の中に登場する動物・昆虫から当時のアメリカ黒人の生活や歴史を考察する。

このようにブルースという黒人による黒人のための感情表現に見られる語彙を言語学的観点から考察することによって、その当時の黒人生活・歴史的事実・言語をより深く知ることができる。

## ② Sally Hemings に見るゴシック・ロマンスの系譜

石田 依子

Barbara Chase-Riboud の *Sally Hemings* の初版は 1979 年であったが、同作者による *The President's Daughter* が発表された 1994 年に、

Ballantine 社より再版が刊行された。このテキストには、初版には掲載されていなかった作者による Afterword が載せられているが、その中で、Barbara Chase-Riboud は、*Sally Hemings* を執筆する際に「ゴシック小説」の形式を取り入れたことを語っている。その所以は、Chase-Riboud の言葉を借りれば、ゴシック小説には「まさしくアメリカの核心たるものがぴたりとはまり込むような真髓があった」からである。彼女は、*Sally Hemings* において、Jefferson と Hemings の関係を「ラブストーリー」として提示しながら、異人種混合の問題を追及したのだが、本論では、Barbara Chase-Riboud がこの作品を描いた際に、なぜゴシックという形式に着目したのかということ考察した。

イギリスにしても、アメリカにしても、ゴシック小説と「血」は切っても切れない関係にあるわけだが、これは殺害や拷問などの残虐行為によって身体から血が飛び散るという意味での「血」だけではなく、血筋を表す「血」との両義的な意味合いが含まれる。*Sally Hemings* には、「血」をモチーフとして奴隷制度の残酷さが描かれた場面があるが、Chase-Riboud は、いかにもゴシック的なこの事件を、文字通りの「流血」という「外枠」だけを描いて終わらせるのではなく、「異人種混合」という「内枠」にまで発展させている。*Sally Hemings* における、Goerge 殺害事件から発展して、Sally が

白人と黒人という異人種の血が混ざり合うことにおぞましさを感じる場面は、ゴシックの特質が実に巧みに表現された場面なのだ。

さらに、「異人種混合」に対する恐怖は、主人公 Sally Hemings の身体表象を通して助長される。18 世紀以来、ゴシック小説は家父長制的イデオロギーを強化するものと見なされ、そこでは女性のセクシュアリティは二通りに分類される。すなわち、女性の性は秩序を乱すがゆえに抑圧する必要があるものだという一方、怪物とされるのは女性ではなく、むしろ女性を蝕む男性のほうであり、女性は常に犠牲者という役割を担うというものである。Sally Hemings をゴシック小説として解釈した場合、Sally という女性は、このようなゴシックにおける女性解釈の表裏を体現する存在として読むことができる。作品の中でしきりに強調される Sally の「美貌」は、彼女が「妖婦」であることを表象するが、「奴隷」という立場を考えれば、Sally は「犠牲者」としての立場でもあるのだ。Sally Hemings の身体表象という観点でこの作品が興味深いのは、女性の身体や性に対して周りが恐怖する側面と、本人の女性自身がアイデンティティ喪失の恐怖や疎外感を感じ取る側面とが絡み合っ、ゴシックの要素である恐怖や不安を拡張しているところである。

ゴシックをテーマとして、異人種混合・ジェンダーの角度から Sally

*Hemings* という作品を分析すると、人種の混濁が現実の恐怖を喚起し、混血や女性のセクシュアリティが社会的不安を喚起するものだということが見えてくる。すなわち、人種とジェンダーの両方が内包されている *Sally Hemings* というテキストは、おのずとしてゴシック・テキストとして完成されたのだということが理解できるのである。

5月例会 2006年5月27日(土)神戸市外国語大学

## シカゴAME教会の「危機」 — 黒人の北部大移住と黒人教会

山下 弥生

黒人の北部大移住は人口移動だけではなく、黒人たちの生活、特に信仰生活に大きな影響を与えた。

典型的北部の工業都市であるシカゴでは、この大移動により多くの storefront church が出現し、バプティストが急激に信者を増やし、それまで優勢であった AME 教会(アフリカン メソヂスト エピスコパル)が低

迷、不安定な状態に陥った。この現象を Best (Best, Wallace D. *Passionately Human, No Less Divine: Religion and Culture in Black Chicago, 1915–1952*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2005.) は AME の危機だと書いた。しかし、黒人教会は、教会と信徒たち両方のサバイバルのために、常に「時代に適応する」いわば、「適者生存」のような環境に適応する能力を持っているという性格を考えれば、AME 教会は確かに「危機」には瀕していたが、それは「時代に対応している」真っ最中であつたといえる。

大恐慌を含むグレートマイグレーション期は、黒人の宗教が近代的なかたちに変わっていった大きな転換期でもある。ゴスペルの誕生により、教会に対する認識が変わり、新聞・ラジオの発達により、それまでは、教会が重要な情報の発信源であつたことが、そうではなくなる。教会関係者以外のリーダーが登場し、黒人教会はその存在理由を改めて模索しないといけなくなった。変わらないことは、黒人、すなわち信者がサバイバルできない限り、黒人教会も存続しないということ。常に信者たちのニーズにこたえるということが、黒人教会のひとつの使命であり、その強い使命感が、このユニークな特徴を生み出したのではないだろうか。

## 会員からの投稿

### アメリカ革命とアフリカ人奴隷と大英帝国

須田 稔

*TIME* 誌 5 月 15 日号の BOOKS のページに、Richard Lacayo という人が Simon Schama の本 *Rough Crossings: Britain, the Slaves, and the American Revolution* を紹介している。標題は To Arms Against America! The tale of the escaped slaves who fought with the British turns the American Revolution on its head だ。

アメリカ革命が自由を獲得できる好機になるかもという希望を抱いて、イギリス側に味方して戦った何千という逃亡奴隷。このことを語っている書物らしい。

アメリカ独立前夜、本国に叛旗を翻した北アメリカ植民地 250 万人 (1774 年の推定総人口 260 万人。うち白人 210 万人、ニグロ人 50 万人



とする書もある)。George Washington, Thomas Jefferson, Patrick Henry (3人とも奴隷所有者であった)の故郷 Virginia では、ニグロ人は人口の 40% を占めていた(1774 年 20 万人、1775 年自由黒人を除くと 16 万 5000 人という数字もある)。Virginia の最後のイギリス人知事 Lord Dunmore も奴隷所有者であったが、奴隷黒人もイギリスの兵士になれば自由の身になれると公言したらしい。解放を切望する奴隷たちが応募した。

本書は、ワシントンの補佐官 John Laurence のような奴隷制廃止論者たち、British Freedom と自称する黒人など固い決意の奴隷たち、数多くの無頼の徒を登場させる。ヒーローの一人は anti-slavery pamphleteer の Granville Sharp。彼は、イングランド訪問中に主人から逃亡したアメリカ奴隷を擁護して、イングランドでの裁判に金銭の援助をした。判事の Mansfield。彼はシャープほどの熱烈な奴隷制廃止主義者ではなかったが、黒人もまた人間であると知るに至る。彼の甥と黒人女性のあいだに生まれた Dido Elizabeth Belle Lindsay を彼と妻は育てる。彼の奴隷勝訴の判決は、アメリカの植民地で戦争が始まったとき、黒人たちに大英帝国を讃仰させることになった。

戦後、何千という元奴隷たちは王政派白人たちの Nova Scotia への亡命大脱出に加わる。別な群れは Sierra Leone に町を建設しようと、アフリ

カに出航する。彼らは疾病と飢餓に瀕する幾星霜を生きることになるのだが、定住者はアフリカ系アメリカ人の自治的共同体の先駆者となった。それは “British freedom” などではなかったが、アメリカ合衆国がその後多年にわたって提供しなかった liberty は僅かながらも存在したのである。——以上が紹介の概要である。

恥ずかしいが、わたしは、アメリカ独立戦争で解放の夢を賭けてイギリス軍側に参じた黒人奴隷たちの存在を知らずにいた。*The Chronological History of the Negro in America* に、Granville Sharp も、Lord Mansfield も、Lord Dunmore も記録されているではないか。

1771 年、奴隷制はイングランドでは裁判所の判決で廃止された。Stewart という名の男が所有する奴隷 Somersett はイングランドに連れてこられて逃亡した。捕まった奴隷をステュアートはジャマイカ行きの船に乗せた。が、人身保護令状が執行された。反奴隷制の弁護士グランヴィル・シャープがマンズフィールド卿の法廷で論陣を張った。マンズフィールドの裁決は、奴隷制の創出を肯定する法律が存在しないゆえイングランドでは奴隷制度の実行は不能、かつ、1 人の人間の自由を奴隷だと言い立てて奪う法律上の根拠はない、というものであった。ソマーセットは釈放された。これがイングランドの逃亡奴隷に対する態度となった。——こ

う書かれている。

1775年、イギリスのヴァージニア知事ダンモア卿はイギリス軍に入れば男の奴隷は自由の身にしてやると公告、その反響の大きさに、ワシントン将軍は1776年1月、自由ニグロの大陸軍への参入を勧告した。革命中に逃亡した奴隷の数は、さまざまに推定されている。ヴァージニアのほかジョージア、サウスカロライナなどを含めると、数百人がイギリス軍の兵士となって自由の身になった。もっとも、この年から1783年までの時期にアメリカ革命軍に参加したニグロは8000人ないし1万人を数えた、などのことがこの年代記には書かれている。

第2次世界大戦以後、アメリカが戦争または武力干渉した国・地域は21を数える。ブッシュ大統領が京都で行なった演説に free と freedom と liberty が合計 75 回使われていたという。「自由」は侵略者と抵抗者とでは、似ても似つかぬ意味になる。「革命」も「解放」も「自衛」もだ。

*TIME* 誌5月8日号は The lives and ideas of the world's most influential people を特集。Condoleezza Rice に power と purpose を持つと賞賛される Oprah Winfrey が、Holocaust survivor Elie Wiesel を推奨する言葉の中で、Wiesel ,77, has taught us that we must not forget; that there is no greater sin than that of silence and indifference と書いているのに敬服す

る。記憶が和解と友愛の基礎だと痛感するわたしの日々なのである。

(立命館大学・名誉教授)

## フリーダム・キャラバン

藤川 二葉

4月16日、イースターの日曜日、ここアトランタのエベニーザー教会 (Ebenezer Baptist Church) の礼拝に出かけた。エベニーザーは、キング牧師がかつて所属した教会であり、記念館、キング牧師出生の家等が集まるキングセンターのなかにある。たくさんの白いユリに囲まれた教壇の上で、ラファエル・ワーノック (Raphael G. Warnock) 牧師がおこなった説教の一部が、私をとらえて離さなかった。

「あなたがもしジャズが好きなら、ニューオーリンズのこと好きはずです。ニューオーリンズが好きなら、ニューオーリンズの人びとを尊敬しなければなりません。ニューオーリンズは黒人の創造性を体現しています。」

彼が話しているのは、4月22日に行われたニューオーリンズ市長選の予備選挙についてである。昨年8月のハリケーン「カトリーナ」以来初の、

色々な意味において特別な選挙だ。あの災害から8ヶ月たっても、多くの人びと、特に黒人の人びとは州外に避難したまま、戻ってくることができていない。このような人びとにとって、重要な選挙であるにもかかわらず、ルイジアナ州は州外に投票所を設けることを拒否した。連邦裁判所もこの判断を支持した。また安定した住所がない人びと、インターネットへのアクセスが難しい人びとにとっては、不在投票も便利なものではない。

4月の始め、ニューオーリンズに行き、このような状況を改善することを求めたが聞き入れられなかったことから、ワーノック牧師は「フリーダム・キヤラバン」というプロジェクトを計画した。アトランタに住む、ニューオーリンズから避難してきた人びとを、バスに乗せてニューオーリンズに連れて行き、投票をさせるというプロジェクトである。イースターの礼拝で、ワーノック牧師はこのプロジェクトの話をし、ボランティアを募った。彼は次のことも付け加えた。2005年のアメリカで、わたしたちは奴隷船を想起させる状況を見た。ハリケーン直後のコンベンション・センター。人びとが食べ物、水、危険からの保護を与えられなかった。ハリケーンは自然災害だが、「非」自然災害——レイシズム——もわたしたちは目の当たりにした。

オーラルヒストリーと料理の文化を研究し、音楽や料理を楽しみ、生活を満喫しようと意気込んでニューオーリンズに到着したものの、一週間で別

れを告げた私は、牧師の話を聞いて、何かをせずにはいられない気分になった。大学の手配でハリケーンが直撃する前に避難したので、私は安全を与えられた。避難後も、アトランタのエモリー大学に受け入れてもらい、研究も始めることができた。でもニューオリンズへの特別な思いは常にあった。

次の日、ボランティアのミーティングに足を運んでみる。このプロジェクトはすでによく練られていて、役割分担も決まっている。メディアの対応班、受付・登録係、食べ物・飲み物調達班……。私が足手まといにならずに貢献できそうなことは、あまり見当たらなかった。しかし、どうしても付いて行って、見たい。ある女性に尋ねると、同行して写真を撮るという役割を与えてくれた。こうして私は、「フリーダム・キャラバン」の席をえることができた。

出発当日、つまり投票日 22 日の前日 21 日、夜 7 時から教会で礼拝があった。参加する人もしない人も、「キャラバン」の成功を願って歌った。ゴスペルが大きな教会のなかに響き渡る。とてもパワフルで、そして美しい礼拝だった。ワーノック牧師が言った。「キャラバンを走らせ続けましょう。私たちが今回キャラバンを組織したのではない。それは昔からあったのです。私たちはただ、乗り込むだけでよいのです。」

Get on the board. 公民権運動時のフリーダム・ライダーや、95年のミリオンマン・マーチへのバスの旅を描いたスパイク・リーの映画「ゲット・オン・ザ・バス(*Get on the Bus*)」を思い出す。長い間続いてきた、人びとの努力と、自由への旅を継承していこうということを、牧師は意味しているのだ。

4台のキャラバンは夜 10 時にアトランタを出発、朝早くにニューオーリンズに到着した。連携プレーをした現地のセント・ステファン教会(Greater St. Stephen Full Gospel Baptist Church)でまた礼拝があった。この教会の牧師の説教が、バスの長旅の疲れをいやし、投票へ出発するムードを高めた。「今日、あなたたちは歴史を作ります。黒人の歴史を。」

3つのグループに分かれ、投票所に向かう。投票所のシステムはとてつもなくややこしい。住所によってこまかく分かれているうえに、ハリケーン前とハリケーン後で場所が変わっていることがよくあるからだ。しかし、私たちのグループには投票をした人が4人ほどしかいなかったため、2時間もかからないうちに全員が投票を終えることができた。ひとりの女性はネーギン現市長に投票した。「彼がはじめた仕事だから、最後まで彼にさせるべきだ」からだという。「故郷に帰ってきて投票するのはとっても嬉しい。」投票を済ませたあと、笑顔でそういった。そして親類と会うために、また故郷を

自分の足で歩くために、彼女はバスを降りていった。

アトランタへ戻るのは午後 5 時頃ということになっていたから、出発まで時間がたくさんあった。とにかくお昼を食べようと、バスの運転手さんのおすすめのレストランへ。こぢんまりとしていて、食堂といった感じの店。ガンボは残念ながらまだ作っているところだったので、食べられなかった。でもニューオリンズのもうひとつの代表料理、辛いソーセージの入ったレッドビーンズアンドライスを食べられたので大満足だ。

グループのひとりが、お店の隣にニューオリンズで最も古い黒人の教会があるらしいと教えてくれた。食事のあとさっそく見に行く。小さくて、白が青空に映える、美しい教会だった。セント・ジェームズ教会 (St. James AME Church) という。敷地内に置かれたトレーラーハウスに住み、教会を管理している女性がいて、何人かが話をした。私は5歳くらいの男の子に中を案内してもらった。外側からはわからなかったが、ハリケーンによる被害がひどい。「この上まで水がきたよ。」背伸びをしてひび割れた壁の上の方を指差す。「これ見て。」泥がついた机の上に、同じく汚れた写真がたくさん置かれている。乾かしてきれいにしようとしているのだなと思って見ていると、男の子が大きめの集合写真を指差して言う。「この女のひとと、このひと、それとこのひと。それ以外はみんなハリケーンで死んじゃ



ったよ。」20人以上の笑顔が並ぶその集合写真を前に、私は言葉を失くした。

その教会をあとにして、バスはローワー・ナインス・ワード(the Lower Ninth Ward)へ向かった。ニューオーリンズでも被害が最もひどかったことで有名な、黒人の人びとのコミュニティである。教会のメンバーのひとりが以前訪れたことがあり、みんなも見ろべきだといって行くことになった。想像していたよりもひどい状況だった。車の上に家が載っているという信じがたい光景が、いくつもあった。どれだけ水の勢いが強かったのかを物語っている。電気も止まったままで、完全に人が住めない状態だ。ある家の2階の、窓を失った窓枠から、ノートパソコンが見えた。隣にいた男性が、「彼らは豊かではなかったけど、ちゃんと普通の生活をしてたんだ。」と言った。なのになぜこんな不条理を経験しなければならないのか。家々のドアに、数字がスプレーのようなもので書きつけてある。9・21。捜索班が来た日にちをあらわしているらしい。「3週間以上もほったらかしにされたんだ。」口々に人びとがいう。

それぞれがショックと対応しながら、バスは拠点としていた教会への帰路につく。ニューオーリンズの街をキャラバンは走っている。カトリーナの痕跡はあちこちにみえる。まだまだ「フリーダム・キャラバン」の道のりも長い

ように思える。しかし、キャラバンは確かに走り続けている。

つかの間の帰郷のあと、また避難先のアトランタへ帰らなければならないニューオリンズの人びと。ひとりの男性が、ニューオリンズの家、家族、避難先のアトランタで訪れた場所の写真を見せながら話してくれた。「時間はかかると思うけど、必ず戻ってくるよ。やっぱり、一生ここで過ごしたし、美しい街だから。食べ物もおいしいしね。けっこう僕も料理するんだよ、男にしては。けっこう自信ある。」彼の笑顔で、その前に見た光景や聞いた悲しい話から受けたショックが、やわらいでいく。

無事に目標を達成した「フリーダム・キャラバン」は、再びハイウェイの旅、アトランタへの帰路につく。たくさんの見たもの、聞いたこと、それに関する考えが頭のなかでぐるぐるまわっているが、疲れと眠さも負けていない。ぼんやりしながら、イースターにきいたワーノック牧師の言葉をもう一度思い出す。ジャズが好きなら、ニューオリンズのこと好きはず。ニューオリンズが好きなら、ニューオリンズの人びとを尊敬しなければいけない。今日私が見たこと、聞いたことを知るべき人は、日本にも、世界にもたくさんいると思った。

(九州大学大学院博士課程)

## International Scholars の役割—African American National Conference に参加して

坂下 史子

アメリカの大学院はコースワークやティーチングなどで学期中は他のことなど何もできないほど多忙になるのが常だが、その間隙を縫ってなるべく学会に参加するようにしている。今年は昨秋の ASALH に続き(会誌 75 号に学会報告を載せていただいた)、三月と五月に発表を行った。後者は American Literature Association の年次大会で、黒人研の今年の年次大会のゲスト・スピーカーでもあるロレッタ・ウッドワード教授が会長を務める African American Literature and Culture Society 主催のセッションに、三石庸子先生、石田依子先生とともに参加させていただいた。大会では木内徹先生、一昨年の黒人研大会のスピーカーだったキース・バイヤマン、ウィルフレッド・サミュエルズ両教授にもお会いした。

三月の学会は、ミシガン州立大の African American and African Studies Program が主催したコンファレンスで、「The Black Scholar and the

State of Black America」というテーマだった。せっかく自分の大学でコンファレンスが行われるのだからぜひ参加したかったのだが、このテーマを聞いて、どうしたものかと当初は躊躇した。黒人ではなく、アメリカ人ですらない研究者にとって、アメリカのアフリカン・アメリカン・スタディーズ関連の学会で発表するには少し勇気が要る。研究者としての自分の立場、研究の正当性を常に問われているような気がするからだ。(アメリカだけでなく、カリブ、アフリカを研究する場合もおそらく同様だろう。)学会に限らず、大学院での講義や友人との会話においてさえ頻繁に話題に上るのは、自分の修めた知識をいかにして黒人コミュニティに還元するかということだ。そこで、私にとってのコミュニティはどこか？この分野における自分の役割は何か？というやっかいな問題に常に直面することになる。

会員の方々の中にも同じような状況に遭遇したことのある人は多いと思う。そして、私の行き着いた結論も、おそらく多くの会員の方が感じていることと同じかもしれない。私はコンファレンスのテーマを逆手に取って、「The Role of International Scholars in African American Studies: Teaching and Studying African American History from a Japanese Perspective」と題する発表を行った。発表では、我々international scholarsの貢献として三つの可能性を提示した。一つ目は、いわゆる「国際的視点」を提示する

こと。二つ目は、アメリカ国外での黒人に対する無知や偏見をなくすべく、教育を通じて啓蒙を行うこと。三つ目は、アフリカン・アメリカン・スタディーズを国際社会の様々な差別状況に取り組む出発点とすること、である。

まず一つ目だが、アフリカン・アメリカン・スタディーズにおける安易な「国際的視点」の提示は、私の意図するところではない。(つまり、何でも日本が入っていれば良い、というのではない。)また、アメリカの研究者が、「国際的視点」という周縁に我々を閉じ込めて安心してしまうような構図を望んでいるわけでもない。理想とするのは、研究者間の対話を促進しアフリカン・アメリカン・スタディーズの枠組み自体を再定義するような、クリティカルな「国際的視点」である。

二つ目として、発表では、かつての欧米帝国主義と近年のアメリカの文化帝国主義によって全世界に浸透し続ける黒人のステレオタイプの問題を挙げ、アメリカ国内の人種主義に取り組むだけでは人種問題の解決には不十分であることを述べた。日本の例として、1986 年の中曽根首相の黒人蔑視的発言や、さらに身近なところで非常勤時代に担当した学生や私の友人が抱いていた黒人のステレオタイプなどを紹介した。三つ目として、アメリカの人種問題が日本における様々な問題を一層深く考える契機となった私自身の経験に触れ、例えば「日本人単一民族」神話が日

本社会における様々なマイノリティ・グループを抑圧し続けている歴史や、米軍基地によるいわゆる構造的沖縄差別の問題などを、アメリカの構造的な人種差別との関連で簡単に紹介した。

最後に、人種差別を経験しつつ他のアジア人を抑圧した帝国主義時代の日本の立場や、「有色人種」としてアメリカで些細な差別を被ることのある一方で、日本に戻ればマイノリティ差別の体制を支持するマジョリティの一員たりうる自らの立場に触れつつ、抑圧される側が同時に抑圧する側となる可能性を挙げ、こうしたことに常に意識的であり続けなければならないと結んだ。発表では、アメリカの外交政策がもたらしている様々な抑圧に多くのアメリカ黒人が無関心であることを指摘したロビン・D・G・ケリーの論考にも言及した。

発表の反響は良く、多くの人から有益な質問や好意的なコメントをいただいた。発表で挙げた様々な(特に三つ目の)例に、これまでこのような問題との関連を考えたこともなかったと言う人もいた。アメリカのアフリカン・アメリカン・スタディーズの担い手の中には、アメリカ国内の問題に視野を限定してしまっている人も少なくないが、究極的には、アメリカの黒人コミュニティだけでなく、国際社会というコミュニティの改善に従事することが理想であろう。international scholars の一員として、これからも同分野

に少しでも貢献していくことができればと思う。ただし、本当の課題はむしろ、「グローバル・パースペクティブ」と題されたセッション自体に来なかった人々に、いかにしてこうしたメッセージを届けるかにあるのだが。

(ミシガン

州立大学大学院博士課程)

#### 海外のメディアから

アメリカ政府の移民制限政策に反対する運動が全米各地に広がる一方で沈黙している黒人の公民権運動団体とそのリーダーたちに覚醒を促す Earl Ofari Hutchinson のコラムを紹介します。掲載は *BlackNews.com*

March 28, 2006

**OLD CIVIL RIGHTS GROUPS MIA ON NEW CIVIL RIGHTS MOVEMENT  
- IMMIGRANT RIGHTS FIGHT**

*By Earl Ofari Hutchinson, BlackNews.com Columnist*

The great irony in the gargantuan march of tens of thousands in Los Angeles and other cities for immigrant rights is that the old civil rights groups have been virtually mute on immigration and the marches. There are no position papers, statements, or press releases on the websites of the NAACP, Urban League, SCLC on immigration reform, and nothing on the marches. The Congressional Black Caucus hasn't done much better. It has issued mostly perfunctory, tepid and cautious statements opposing the draconian provisions of the House bill that passed last December. The bill calls for a wall on the Southern border, a massive beef up in border security, and tough sanctions on employers that hire illegal aliens. The Senate Judiciary Committee will wrestle with the bill this week.

Only nine CBC members initially backed the relatively liberal immigration reform bill introduced by CBC member Sheila Lee Jackson in 2004. The lone exception to the old guard's mute response was their lambaste of



Mexican President Vicente Fox last May for his quip that Mexicans will work jobs that even blacks won't.

The silence from mainstream civil rights groups and the CBC's modest support for immigrant rights is a radical departure from the past. During the 1980s when immigration was not the hot button issue it is today, the Caucus in 1985 staunchly opposed tougher immigration proposals, voted against employer sanctions for hiring illegal immigrants, and an English language requirement to attain legalization. That was an easy call then. Those were the Reagan years, and Reagan and conservative Republicans, then as now, pushed the bill. Civil rights leaders and black Democrats waged low yield war against Reagan policies.

The NAACP made a slight nod to the immigration fight when it invited Hector Flores, president of League of United Latin American Citizens, to address its 2002 convention. The NAACP billed the invitation as a "historic first." But it was careful to note that immigration was one of a list of policy initiatives the two groups would work together on. That list

included support for affirmative action, expanded hate crimes legislation, voting rights protections, and increased health and education funding.

There is no indication that the two groups have done much together since the convention to tackle these crisis problems, and that includes immigration reform.

The CBC and civil rights leaders tread lightly on the immigrant rights battle for two reasons. They are loath to equate the immigrant rights movement with the civil rights battles of the 1960s. They see immigrant rights as a reactive, narrow, single-issue movement whose leaders have not actively reached out to black leaders and groups. Spanish language newspapers, and radio stations, for instance, drove the mammoth march and rally in Los Angeles. Their fiery appeals to take action were in Spanish, and many of the marchers waved Mexican and El Salvadorian flags.

Black leaders also cast a nervous glance over their shoulder at the shrill chorus of anger rising from many African-Americans, especially the

black poor, of whom a significant number flatly oppose illegal immigrant rights. But illegal immigration is not the prime reason so many poor young blacks are on the streets, and why some turn to gangs, guns and drug dealing to get ahead.

A shrinking economy, sharp state and federal government cuts in and the elimination of job and skills training programs, failing public schools, a soaring black prison population, and employment discrimination are the prime causes of the poverty crisis in many inner city black neighborhoods. The recent studies by Princeton, Columbia and Harvard researchers on the dreary plight of young black males reconfirmed that chronic unemployment has turned thousands of young black males into America's job untouchables.

Yet, many blacks soft target illegal immigrants for the crisis and loudly claim that they take jobs from unskilled and marginally skilled blacks.

Black fury over immigration has cemented an odd alliance between black anti-immigrant activists and GOP conservatives, fringe anti-illegal

immigration groups, and thinly disguised racially tinged America first groups.

Historians, politicians, and civil rights activists hail the March on Washington in August 1963 as the watershed event in the civil rights movement. It defined an era of protest, sounded the death knell for the near century of legal segregation, and challenged Americans to make racial justice a reality for blacks. But the estimated million that marched and held rallies for immigrant rights in Los Angeles and other cities dwarfed the numbers at the March on Washington. If the numbers and passion immigration reform stirs mean anything, the judgment of history will be that it also defined an era, sounded the death knell for discrimination against immigrants, and challenged Americans to make justice and equality a reality for immigrants, both legal and illegal. The battle over immigrant rights will be fought as fiercely and doggedly as the civil rights battle of the 1960s. That battle forever altered the way Americans look at race. The immigrant's rights battle will profoundly

alter the way Americans look at immigrants. The silence of civil rights leaders won't change that.

## 入 会 者

### ☆ 船田 麻衣子 氏

今年4月に広島女学院大学大学院博士課程後期に入学しました。アメリカ黒人女性作家の中でも、Toni Morrison の作品に興味を持っております。まだまだ、未熟ではありますが、ご指導の程、よろしく申し上げます。

### ☆ 佐藤 恵津子 氏

所属 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程

関心ある分野は、「フェミニズムと人種と歴史記述」。特に興味があるのは、アメリカ合州国奴隷制廃止運動女性史です。今は、「アンテベラム期北部で活躍した黒人女性アボリショニストの歴史をどう記述するか」という問いの答えを求めて、文献にあたっています。よろしくお願い致します。

### ☆ 尾山 誉 氏

現在、広島大学大学院文学研究科博士課程後期の1回生です。黒人音

楽、黒人英語、黒人文学に興味があります。特に、音楽ではアメリカのブルースに興味があり修士論文も「ブルースに見られる黒人英語」で書きました。この論文では、ブルースの歌詞を語学的観点から考察しました。今後は、黒人英語について色々な角度から研究していきたいと思っています。何卒宜しくお願い致します。

☆ 萩原 弘子 氏

大阪府立大学教員

〒590-0035 大阪府堺市堺区大仙町2-1 大阪府立大学 大仙キャンパス

視覚文化と権力関係、視覚的表現(写真、映画、ファイン・アートなど)と人種、階級、性別などに関心を注いでいる。それに関連の著作は『この胸の嵐—英国ブラック女性アーティストは語る』(現代企画室)、『ブラック—人種と視線をめぐる 闘争』(毎日新聞社)など。

☆ Fikru Gebrekidan(フィクル・ゲブレキダン)氏

エチオピアで生まれ、アメリカの大学で歴史学などを学ぶ。ミシガン州立大学よりアフリカ史で博士号を取得。博士論文のテーマはエチオピアとカ

リブの関係史。アジアなどにも広く関心を持つ。現在はカナダのセント・トマス大学助教授。

☆ 小泉 弥生 氏

現在、米国ニューヨーク州にあるコーネル大学図書館で仕事をしつつ、同大学院では東アジア研究科の博士課程で勉強をしています。1996年に東京外国語大学スペイン語学科卒業後、米国に来ました。1998年にアイオワ大学人類学修士課程中退後、2001年にハワード大学に移り、そこで哲学修士を取得しました。来年の9月からは図書館の仕事をやめて、本格的に学業に再度取り組みたいと思っています。専門は日本研究ですが、黒人の事柄との比較研究をやりたいと思っています。黒人ディアスポラの哲学で日本の現在までに至る戦後を解釈するというのをやっていきたいのですが、なかなかトピックに焦点が見いだせなくて困っているところなんです。よろしくお願いします。

☆ Yuichiro Onishi 氏

Yuichiro Onishi is Assistant Professor in the Center for Ethnic Studies at Borough of Manhattan Community College of The City University of New

York. He holds his B.A. from Macalester College and M.A. and Ph.D. in history from the University of Minnesota. Currently, he is working on a book-length manuscript titled *Giant Steps of Black Freedom: Trans-Pacific Solidarities in Black America, Japan, and Okinawa, 1917-1972*. The book offers the analysis of possibilities and limits of cross-racial solidarities between Black Americans, the Japanese, and Okinawans in the twentieth century and elucidates the trans-Pacific formations of Black radicalism.

(順不同)

## 退 会 者

☆ 東 知史 氏 今年度(6月)をもって退会されます。

## 会 員 消 息

☆ 藤川 二葉 氏



フルブライト奨学生として、2005年8月よりアメリカ・アトランタにおいて  
黒人女性のオーラルヒストリー、食文化の研究の為滞在。2006年7月よ  
り本来の調査地ニューオリンズに戻る予定。

☆ 鉄井 孝司 氏

4月15日、神戸港停泊中の Semester at Sea (洋上大学ーピッツバーグ  
大学主催)専用船 Explorer 号船上の講座で “Japanizing Jazz: Interplay  
Between Two Cultures” と題し、日本におけるジャズ受容の歴史とジャ  
ズが意味するものについて講義を行う。

☆ 須田 稔 氏

監修者として Allen Nelson 著 *To End the Misery of War Forever* を英文  
教材『アレン・ネルソンの「戦争論」III』と題し5月に出版。アレン・ネルソ  
ン講演を記録する会 編、京都・かもがわ出版。

☆ 古川 哲史 氏

「英国議会資料」の原本のコレクションとしてはもっとも完全なセットといわ  
れ、様々な経緯を経て国立民族学博物館で所蔵されることになったく京

セラ文庫：英国議会資料＞（約 13000 冊）。その資料集作成プロジェクトの中で、エチオピア関係の資料編纂・解題を担当した。2006 年 1 月に、古川哲史編『「英国議会資料」資料集 10 巻：エチオピア篇』（国立民族学博物館・地域研究企画交流センター、CD-ROM 版、6090 頁）を刊行。

（順不同）

### Coda～編集後記にかえて

少し前に会員の方から「ことば」に関するご意見を頂戴しました。その示唆に満ちた提言をここで短く要約するには残念ながら編集者の能力はあまりにも不足していますが、どうしてもそのことについて述べておかなばなりません。学会誌などから得られる議論や情報に学ぶ点が大いにあることを認めた上で、その提言は「ことば」に対する私達の感覚がまだまだ研ぎ澄まされていないことに警鐘を鳴らすものでした。

情報伝達技術の進歩と共に私達は以前にも増して膨大な量のことばを発信あるいは受信し続けています。いわばことばを次から次へと「消費」しているのです。一方で放たれたことばがどのように相手に届いているのか、また自分の意図した意味が正確に相手に了解されているのかと

いうことに私達はあまりにも無関心なのかもしれません。映像や音が現代のコミュニケーションで重要な役割を担っていることは否定できませんが、だからと言ってことばの比重が軽くなったわけではないのです。その大部分がことばを使う作業に従事している私達にとって「この位の表現でいいだろう」という地点は存在しないも同然で、不断の研鑽を積むことが必要なのだということを自戒もこめて記憶しておきたいと思います。

その貴重なご意見を下さった会員の方は、「ことばを刻むことは難行苦行だ」と結んでおられます。

＊

＊

＊

会員の皆様からの原稿を募集しております。出版、学会発表、報告など概要だけでもお寄せ下さい。「会員消息」欄で紹介いたします。原稿をお寄せくださった方々にはこの場をお借りして御礼申し上げます。会報は皆様のご協力で成り立っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





＜編集＞ 黒人研究会・編集部

〒608-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学国際関係学部・加藤恒彦研究室気付

＜編集者＞ 鉄井孝司